
あの、そこ私の席なのですが

山野みどり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの、そこ私の席なのですが

【Zコード】

Z9779Y

【作者名】

山野みどり

【あらすじ】

偶然、自分の席に座るクラスメイトを目撃してしまった加奈。その日以降、彼の数々の行為に振り回される羽田。無口美形ワンコに溺愛される平凡少女のお話です

これは一体……？

慌ただしく教室の扉を開けた桑原加奈は、飛び込んできた光景にピシリと硬直した。はずんでいた息も眼前のありさまに一時停止する。

えーっと、今は三時間目と四時間目の間の休み時間でー。美紀と次の移動教室へと向かう途中にノートを間違えた事に気づいて、時間も残り少ないから慌てて一人引き返してきましたんだけ……。

教室に残っていたのはクラスメイトの男子生徒一人。

「あー……」

立ち尽くす加奈を見て、気まずげに顔を引きつらせる松本君と……気のせいでなければ加奈の席に座り、加奈の机にしがみついているもう一人。

「……」

うん。窓際後ろから二番目。そこは紛れもなく私の席、だよね？
こちらに後頭部を向けているその人物の頭はなぜか、上下に激しく揺れていて。よくよく見やれば頬を机に擦りつけて……擦り、付け

絶句する加奈に背を向けて、誰かさんの肩を揺する松本君……つ

「荒川、荒川」

て荒川君！？

「……なんだ、邪魔するな」

顔も上げず不機嫌そうに答える。……「ん、荒川君の声ですね。といつか邪魔ってなんですか。

「いやいや、ほら、見られちゃったから
だから邪魔す……なに？」

のつそりと松本君を見上げた荒川君の視線が動き、扉の前で往生したままの加奈とぶつかる。

切れ長の一重の目を常よりも僅かに見開き、じちらを凝視する荒川君。その両手は未だ加奈の机の両端をしかと握りしめたままで。心なしか片頬が赤く見えるのは擦り過……いや、目の錯覚だよね。てか、ほんとに向してるのさ荒川君。人の席で。

「 「 「 …… 」 」

三人の間に、とてつもなく重い空気が流れる。
と、その静寂を破り松本君が口を開いた。

「あー桑原さん、じしたの？」
「……それはこっちの台詞なんだけど」
「……だよねーあはは、はは」

松本君のわざとらしい笑いが響く中、荒川君はこちらをじつと見つめたまま動かない。露骨なまでのその視線になんとか加奈の方が気まずくて、ぐるぐると忙しく視線を巡らせる。

「あ、やばいー 次始まっちゃうよー」

唐突に氣まずさえる空氣を払拭するよつ、松本君が白々しさも全開の口調で言つと、荒川君の腕を掴み、へばり付いている机から力ずくで立ち上がらせた。ガタタと椅子が派手に動く。
そのままぐいぐいと荒川君を伴つて歩きだす。加奈の横をそそくそと通り過ぎ

「桑原さんも急いで急いでー、遅れるよ」

大きな身体をズルズルと引きずるようにして出て行つていった。
その間も荒川君の視線は加奈から外れないまま。

「……なんだつたの」

どつと疲れを感じながら、ノートを取り出すために机に向かう。
一応、我が机に何かされてないかもチェックするためにも。

結局、次の授業へは少し遅れてしまった。いや、だつてほら、異常がないか念入りに調べてたら……ねえ。すみませんと頭を下げた時も足早に席に向かう時も、とある方向から重い視線を感じるよくな……氣のせいよね。

教室での席がそのまま反映されているので、窓際後ろから一番目

の席へと腰を下ろす。

「あー それじゃ あ教科書23ページの……」

教師の言つままにページを開くも、正直内容なんてちつとも頭に入つてこない。思い浮かぶのは先程の出来事ばかりで。結局あの一人、というか荒川君は私の机で何をしてたんだろう。何やら机に頬擦りでもしてたように見えたけど……いやいや、そんな馬鹿な。

先ほどの一人の姿を脳裏に思い浮かべる。

松本啓介君。ふわふわの茶色い癖つ毛に、垂れ目が甘い顔立ちのモテ男。飄々とした性格で、男女問わず広く浅く人付き合いしている感じ。私も一年になつて同じクラスになる前から知つてたし。

何気ない一言がすごく巧いんだよね、この人。なんでもない感じで自分の望むペースに場を持つてくし……絶対腹黒いと内心思つてたんだけど、さつきはなんか苦病人ぽかつたなあ。日頃纏つてる余裕オーラもなんか消えかけてたし……実はあんなんだつたのか？

そして問題の、荒川祐也君。この人も話題に事欠かない人だよね、女子が三、四人集まればかなりの確率で話題に挙がるし。

癖のない黒髪に切長の瞳の冷徹美形なモテモテ男。常に無表情なその顔は凄まじく整つていて、一切の隙がない感じ。何に対しても無関心な印象があるし、実際そうなんだと思う。いつもダルそうにしてるし口数も少ないし……美形だから許されてる所も多々あると思う。幼馴染だつていう松本君以外と関わつてた所もあんまり見たことないし。あ、ちょっと男子と話すくらいか。

だから間違つてもあんな、へ、変態行為をするタイプじゃない。今しがたの光景を思い浮かべ、知らず知らず教科書の一部分を睨

みつける。

校内一のモテ男だよ？いや他高の娘も荒川君見たさに押しかけてくるんだから、それはそれはモテる男なんだよ。そんな人がなんだつてあんな事を……。

三秒目が合つたら惚れさせるなんて噂さえあるんだから、女には不自由してないだろ？し。まあ告白してきた女の子は全員ばっさり断つてるらしいけど……つってイタいイタいイタい。何だか痛い。体の右側が凄まじく痛い。

ちなみに

私、窓際後ろから一一番目。

荒川君、廊下側の一一番後ろ。

おまけで松本君、私と同じ窓際の一一番前。

まさかと思いつつ、チラリと右斜め後ろを向く……つづつ！

しゅばばつと黒板に向き直る。だけどその焦点なんて合つてない。め、目、目が合つた。一番奥の人と（……荒川君なんだけど）目が合つちやつたよ！

「……」

恐る恐る確認してみる。嫌がる首を無理やり回して……ええええつ。

私、何かしましたでしょうか。

「であるからしてだな、質量を」と云ふ

あと10分、あと10分。チクチク刺さる視線に耐える」と30分。心なしかお腹も痛くなつてきた。要らぬ刺激を引いてしまいますで、身じろぐ事すらまならない。静かな教室に響く先生の声も全て頭を素通りしていくだけだ。あまりに進みの遅い時計にお門違いな怒りすら湧いてくる。

「あ～次、問2と問3を」

「うう、早く終わつ

「荒川、桑原。前に出て解いてみる」

はいはい！？一気に顔が引きつるのが分かる。

「お前ら、やーっとも集中してなーからな

化学担当の山下先生が、半笑いで言つてくるけど……田がマジですか。どうやらお怒りの様子です。

「ほひほひ、早く前に出るー」

「うう、ツイでない。泣く泣くノートを片手に立ち上がる。ガタツともう一人も立ち上がる音が聞こえる。いつなつたら、さつさと終わらせて席に戻る。幸いなことに答えは分かっているし、予習しどいてよかつた。

周りを見なによつに足早に黒板へと向かう、松本君の傍を通り
はちよびつと息をつめてしまつたけど平常心平常心。えーと、チョ
ークチョーク…………え？

ピシッと教室の空気が固まつたような気がする。ところのも全て、
私のすぐ横にいらっしゃる方のせいなのですが。

「回想」

えーと、チョークチョーク。あ、あつた…………え？

私がチョークを握んで3秒後、私の手に一回り大きな手が重なり
まして。横を見やれば荒川君。あ、なるほど。荒川君もチョークを
探してたんですね。にしては3秒のズレがあつたような気もします
が。では、「これは譲りますよ。私は他のを、他のを……」

「回想終了」

あの、手を放してください。

1 (後書き)

お気に入り登録、ありがとうございます
感想いただけすると嬉しいです（○○だったの一言で構いませんので）

「……あー荒川?どうしたんだ?」

静まり返った教室に、山下先生の声がむなしく響く。

先生っ、もつと言つてやつてくださいっ!さつきからこの人、明らかにおかしいんです!援護射撃を求めて振り返ろうにも顔が上げられない。至近距離から視線を感じ、背中を冷たい汗が伝い落ちる。う、動けない。これから私にどうしろと……っ。

俯いた視線の先に、私の手をがつしりと掴んでいる手が映る。自分の手を小さいと思ったことなど一度もなかつたが、こうして眺めるとなんとひ弱なことか。

ちょっと力を入れてみるも全く動かない。

チョークが欲しいなら譲るからつ、まず手を離してえええ。

ぐつぐつと静かな攻防を繰り広げる。遠慮なしの渾身の力でも解けない手には、もはや閉口するしかない。そうしている間にも徐々に、教室のあちこちから興奮したひそひそ声が生じはじめた。

……どう見られてるんだろうか、この状況は。今後の日常生活を思うと意識が遠のきそうになる。

皆さん、しつかり見てくださいね?上有るのが荒川君の手ですかね!荒川君に恋する女が血迷った末の行為とかじやないからね!?そんな噂が流れでもしたら私、私つ。

ふいにガタツと誰かが椅子から立ち上がる音がした。ほとんど縋る
よつないで振り返る。

「荒川、荒川」

予想どおりそれは松本君で。彼はゆっくりと歩み寄ってきた。
……どつかで見たような動きです。ビービーだけ。なんか「ビービー」
とか言つてるし。

テレビで観た獰猛な肉食動物をなだめる飼育員のように見えるのは、
私だけでしょうか。

「あーごめんね、桑原さん。どいつもこいつの振りきりや
つたみたいで」

苦笑しながら、何やら訳の分からぬ事を言つ松本君。
フリキッタつて何ですか？

「ほら荒川、お前もいい加減にしどけよ、授業中だぞ？」

ポンポン、と自分より僅かに長身の荒川君の肩を叩く松本君。
そういう問題でもない気がしますが、救いの手が現れたことにほつ
とします。それに合わせて恐る恐る荒川君へと視線を向けると、私
より20センチは高いであろう彼とばつちり目が合いました。

「「……」

なんじょ、握られた手に更に力が入つたよつな……。

「あー……お前ら、とりあえず席戻れ」

山下先生の疲れたようなような声に、ギギギと握つたまんまだつたチヨークを放す。一文字だつて書いてやしないのにこんなに手が真っ白に、まあ不思議フフフ。逃避の一つでもしないとやってられない。

ふらふら席に戻ろうとする精神的には瀕死の重体の私に更に追い打ちをかけるのはこの男。

……荒川君や、私や席に戻るんだよ。手を放しておくれ。

でもね、この短い時間で私は悟つたよ。普通の人にはこんな事態を乗り切るのは不可能なんだ。ここは無理をせず飼育員さんにお願：……って松本君！なにさつさと戻つてんのさ！この人を置いていかないでつ責任もつて連れて行つて下さい！

着席した松本君の色素の薄い茶色の目をみつめて懇願する。

ん？みたいな顔してるけどあなた、私の言いたいこと位分かるでしょ！？腹黒なんだからつ！必死な私にっこり笑いかける松も

不意に強く手を引かれた。

え、え、混乱状態の中、足がもつれないよう歩きだす。いきなり何です、か……つてひいいいつ。し、視線が、視線が刺さる。あえて見ないふりをしていましたけど、クラス中の視線がグサグサ刺さつてきます。更に、ひそひそと聞こえてくるのはどう聞いても非好

意的な内容です。

……終わった。

いつそ氣を失いたくなる中、自分の席へとたどり着く。

……荒川君の席はこの列じゃないんですけど。なんですか？わざわざ連れてきてくれたんですか、手を繋いで、そうですか……ううう。ひいっ座ります！椅子を引いてくれなくとも座りますから！

荒川君もどうぞ自分の席に戻つてください。

……！？

……なぜ手を握つて居るのとは逆の手で頭を撫でるのです、か

そのまま、クラスメイトがガン見する中、チャイムが鳴るまで撫で続けられた。

……席に戻つてください。

「……じゃあ今日はここまでな

チャイムの後、山下先生が力なく告げるも誰一人、前を見ようとしない。私の頭を撫でぐり回しているこの人も、手を止めようとしない。か、顔が上げられない……つて心なしか触れてくる範囲が広がつてきているよつた氣が……つ。

「ハア……とりあえず、荒川は席に戻れや」

ほら口直、号令一、心底疲れたといつも山下先生が言い放つ。その声に、ぐいぐいと触れていた手をそつと離した荒川君は、じい

いいつと私を見つめた後、くるりと踵を返し席へと戻つて行つた。

起立、という田直の声に叩叩叩と立ち上がりながら、私は平穏な生活の終わりを悟つた。

に、逃げたい……

うつむいていても感じる視線の山、山、山。授業が終わつたにも関わらず誰も教室に戻ろうとしない。驚愕、好奇、嫉妬、あらゆる意味を含んだそれらが私に集中している。

……普通これらは犯人、というか不審な行動を起こした荒川君の方にいくんじやないんですかね？なぜ被害者側の私が槍玉に挙がっているんでしょうか。どう見てもクラスの九割の視線が私の方に集まつてます。女子からはかなり敵意を持つたものを感じますし……やはりの人気の差なんでしょうか、無情です。

そんな状況下にもかかわらず、あらうことか山下先生は早々にして行つてしまつた。去り際「無駄に疲れたな」なんて咳きが聞こえましたけど……先生？以前から放任主義だとは知つてましたが、これはあんまりです。

徐々に大きくなつていぐざわめきに心折れそうになりながら、ぎこちなく動き出す。

向かうは斜め前の席に座る友人、長谷川美紀だ。華奢な背中からは私を巻き込むなオーラがばしばし出していたが構わずその細い手首を鷲掴み、有無を言わさず足早に特別教室を脱出した。

昼休みを迎えた廊下を、一人早足に進む。

「あ……あんた何したのよ」

面倒くさげに問いかけてくる美紀に

「……何もしてない」

精神的な疲れを感じながら力なく答える。

「ほんとに？」

整った顔を訝しげに歪める美紀に、再度うなずく。
なにか理由があるのなら私が教えてほしいくらいだよ……思い当たるのは人の机で何かして荒川君に遭遇した事だけ、あれは

「あんた気付いてなかつただろ？けど、三谷とか凄かつたわよ」
記憶を辿っていると、隣からの笑いを含んだ声に遮られた。

「え？」

「あ、やっぱ気付いてなかつたのね」

はあ。そりや自分の状況にいっぱいいいぱいで、周りを見る余裕なんてとてもとても。ミタニ、どうと三谷蘭子さん？荒川君の事が好、きだと公言している……ひいつー？

「なんか般若みたくなつたわよ」

硬直する私に構つ事無く、クスクスと軽く告げる美紀に理不尽な怒りを覚えそうになる。

笑い「とじやないよ！あ、あの三谷さんに田を付けられでもしたうどりすんのせつーああなんだか息が苦しくなつてきた……。

田の前が暗くなりかけたが「置いてくわよ」といつ無慈悲な美紀の一言に、慌てて後を追つたのだった。

「あ、一人とも遅かつたね～実験でも長引いたの？」

なんとか辿り着いた教室には、いつも一緒にお昼を食べる隣のクラスの友人、石森さくらが待つてくれた。常のように私の席に座つて待つているさくら。一時間前に見た光景とは雲泥の差だ。

「お腹すいたね」

弁当を広げながら笑う温かな笑顔に抱きつきくなるがそんな時間はない。いつもはこの教室で食べているけど今日はとても無理だ。たちまち針ネズミになつてしまつ。

不思議そななさくらに謝り、弁当を包みなおしてもらい各々弁当を手に教室を出る。不思議がりながらも素直に従つてくれるさくら。

ごめん、今は説明する時間も惜しいんだ。美紀はなにやらめんど臭そ�だが気にしない。親友の一大事でしょうが！

めったに利用する事のない食堂へと落ち着き、やつと一息つく。

「加奈ちゃん、どうしたの？」

「くりんと可愛らしく首を傾げるさくらに癒されつつ、口を開こうとしたその時、食堂の空気が波打つた。そこかしこから小さく嬉しげな声が上がる。それにひつかかるものを感じ、ふと視線を巡らすと、食堂の入り口から此方に歩いてくる一人の人物、が……！？」

力キンと固まるこちらを余所に、その非常に目立つ二人組は私たちと同じテーブルに腰を下ろした。

え？

確かにこの食堂のテーブルは六人掛けだから、まだまだ余裕ありますけど。でも周りを見て下さい？まだまだ無人のテーブルが山ほどありますからつ。ほら周りの皆さんもなにやら不審がってますよ？

固まつたままの私に、心底メンドーと言いた気な美紀、不思議そ

うなさくら。

「あーごめん、俺らもいいかな?」

キラキラ笑顔で聞いてくる松本君。

だけどその笑みはもう私には胡散臭いものにしか見えないつ。

「えーっと?」

さくらが此方にくじくじお田々で尋ねてくるが、答えてあげられる余裕はない。

なぜ元凶がここに……しかもまたも私の顔を凝視してゐるし、近い近過ぎる!!

さくら 空席 松本君

テーブル

美紀 私 荒川君

ガタタッと椅子を動かして更に距離を縮めよつとする荒川君。

ひいっ! ? 美紀つ美紀つもつとそつちに詰めて! 当たつてる当たつてるからつ肩腕足が当たつてますから!

食堂の空気が凍りつくのを感じる。

信じられない此方を凝視する田、田、田。あああ本当に倒れてしまいそつです。

「……とつあえず食べましょ」

淡々とした美紀の声に気を落ち着かせ、お弁当の包みに手をかける。簡単な結び目なのに異様に時間がかかる、手が震えているのは気のせいです……つて

「加奈？」

動かない私を呼ぶ美紀の声が聞こえるけど、反応できない。

ええっと……え……？

今朝、母が作ってくれたお弁当を包んだのは私。きちんとお箸も入れた。紅いウサギが可愛い箸入れを……なのに、なぜか割りばしが私の包みの中にいつ！？

ぱつ、反射的に右隣を見る。

私の二倍はある大きなお弁当を広げている人物の右手には……お、お、お、お前かああつつ……

荒川君の右手、その大きな手が持つには違和感バリバリの紅いお箸。ちっちゃなウサギが三匹プリントされてるそれは……私のですよね？

ナゼドウシテナンノタメ……背中が寒くなつてきました、そこから田が離せません。

というか何時のお箸が、この方の手に渡つたのでしょうか……登校して、机の横にお弁当をの入つた手提げかばんを掛けて、それから四時限目の移動教室まで私は席を離れなかつた、箸……うん。

となると、やはりあの時……なのでしょうか。人の机に座りこみ、

荷物を漁つて箸を入れ替

「……荒川、あんたさあ」

左隣の美紀も、私の異常の原因に気付いた様で溜め息を吐くと、呆れを含んだ声で続ける。

「それ。その箸、加奈のでしょ。なーんであなたが持つてるのよ」

あああ美紀さん美紀さん美紀美紀さん！よくぞ聞いて下さったつ。 そなんだよ、この人ちょっと変なんだよ。無視してたけど、この状況下でさえ足が何か変な動きしてるしつなんでそんな擦り付けるよに動いてるんですかっ！

「…………」
女には言わなきやいけない時があるんだつ。幸い此処には美紀もさくらも、胡散臭いけど松本君だつている！

ぐつ、目に入れて荒川君を見据える。相変わらず目が合つけど……負けない！

「あ、ありやかわくん！……」

ひああああ緊張で口が回つてない。負けてる、最初からなんか負けてるよ私つ。

ふうーふうー落ち着け、分は明らかにこりにあらんだからつ！

つて荒川君、なにテーブルにつつ伏してるんですかつ。私はあなたに言いたい事があるんですよ……つて荒川君の大きな体が小刻みに震えてるような。うわつ反動でテーブルまで揺れてるつ、ああお弁当が落ち

「…………かわいい」

はい…………？今なにか仰いましたか？田の前のお弁当を押さえたまま右下を向く。

机に伏せたまま、此方を見上げる荒川君と田が合ひつ。

「かわいい…………加奈」

はい…………いい！？

返り討ちです。

意気込んで問いか詰めようとした所、見事に返り討ちにされました。

カワイイ、カナつて聞こえたんですが……可愛い？カナとはもしかしながら私の事でしょうか。下の名前で呼ばれるほど親しくはないというか関わりも無いといったら？

茫然としたまま、ぐるぐると思いを巡らせる。

ぽけつと見つめる先、のつそりと荒川君が上半身を起こし、手を動かす。そのままお弁当の上に乗っている私の手を丁寧な仕草で外しつつ！

「な、な、な」

なに自然な感じで盗つていってるんですかーそれは私のですよ。大体あなた、自分のお弁当があるじゃないですか、なに人のまで欲しがつてるんですか？

いそいそと（……うん、田の錯覚かな）蓋を開けようとする（……つきつきホーラが出ていいよつたな）荒川君の腕を掴んで止める。

「……？」

何故止めるのか分からないとでも言つたげに見つめられ、思わずたじろぐ。

で、でもでもそれは私のですから、この場合おかしいのは荒川君の方つ。

ひるまづ腕を掴んだままでいると、不意に荒川君が頷いた。
分かつてくれたのかと涙が出そうにな

「半分」

「……え？」

「半分！」

いやいやいやいやそういう事じやないんだよ。おかしいでしきう、明らかに。誰かこの人に常識を教えてあげてください。私の手にはおえません。

助けを求めて振り返る。

真っ直ぐお弁当を見つめ、黙々と箸を口に運ぶ美紀。

手にモモモモと口を動かすやへひ。

田線が合つてなあに？と傾げられたお顔が可愛いです。

紙パックコーヒー牛乳のストローを銜えたまま、生温かい田でこちらを見ている松本君。

「……もつ半分ijoでもなんでもいいから、せやく食べなさいよ」
「からを見もせず投げやりに言つ美紀に、なんだか泣きたくなり
ました。

暫し黄昏でいる内に、荒川君は勝手に蓋を開け終えていた。しか
も気付けば私の右手は荒川君の左手と繋がれている……あれ？

しかもなんか指、絡まつてるんですけど。これは俗に言つ恋人繋
がりてやつなんじや……もつ言葉もありません。

荒川君はそのまま、私のお弁当を凝視していた。
ナ、ナニ？ 気になり私も覗き込む。

えーと今日のお弁当の中身は

ご飯
卵焼き
鳥の唐揚げ
ほうれん草のお浸し
冷凍食品のビジキ
変わらず美味しそうです、ありがとうございます。
でも、どうみても一人分しかないよね。半分ijoいぢりあるつも
りなんだろ。

「加奈の？」
「え？」
「加奈の手作り？」
「え、いやお母さん、だけど」

朝に弱い私にそんな時間はありません。

「……そう

心なし残念そうに呟いた荒川君。
だが次には、深く頷くと

「でも、加奈の」

なにやら自信満々に断言し、右手の箸で卵焼きを摑も……つてち
よつと待てい！

「そのお箸つ……私の、だよね」

それは私のでしょ！荒川君はこの取り換えた割りばしを使ってよ
つ。

「……だめ？」

「……ダメつて何ですか。

「……ダメです」

当然じゃないですか。なに勝手な事言つてるんですか。
とあ返せと左手をつき出す。

「……」

なんか、むづうう理不尽なつて顔してますけど駄目ですよ？こん
な勝手が通ると思、つてちよつ……！？

ひょい、パク、もぐもぐ。

……食べたつ。人のお箸で卵焼き食べたよこの人つ。

「ん」

はあつー？いやいやいや、なに「はい返す」みたいに差し出して

るんですか。むりムリ無理、本気で無理。あなた使ったじゃないですかっ！

「……もうこいです。割りばしで食べるんで、手、離してください」

「……なんか疲れちゃったな、ほんと……左手に割りばしを持ち、ほんやりしてると

「松本」

荒川君が一言、松本君の名前を読んだ。

すると、向かいの席の松本君が、ちょっとどいめんね～桑原さん、なんて言いながら手を伸ばしてきて……あつとこう間に割りばしを割つた。

「はい、ど～ぞ」

「……」

「……これはお礼を言ひべき、なの？」

もはや何が正しいのか分からなくなる。深く考えたら負けのような気もするし。

「……どうモ」

「いえいえド・イタマシト」

とにかくこのままじゅく抜きになってしまひ。午後を空きつ腹で過ごすのは嫌だ。

「荒川君、手」

唐揚げを口に運ぶ荒川君を呼ぶ。

「私、右利きだから」

それに、荒川君はああと頷き私の右手を離す。そして当たり前の
ように私の左手を握った。

「うん。とつあえず今は『』飯だ。『』は……ん

「ん、『』」

「……」

「『』」

「……」

「『』」

「……」

あのう半分」という話は、どうなったんでしようか。

みるみる減つていく中身を、割りばし片手に呆然と見つめる。あ、
あ、あ、『』飯が唐揚げが卵焼きがあ……。

ムグムグ……ゴクン

ふうと満足そうに一息ついた荒川君が

「ん」

半分、と私の方にお弁当箱を差し出してきた。

「……」

ほうれん草とヒジキが僅かに残っている。

「……」

頬を引きつらせながら、チラツと横田で確認してみる。

「……？」

食べないの？みたいな顔してる。

無言の私を見かねたのか

「荒川あ、いくら桑原さんが小柄だからってさあ、それじゃどう見ても足りないって」

美味しそうな焼きそばパンにかぶりついている松本君が、呆れたように告げる。

すると荒川君は不思議そうに私を見つめ、問い合わせてきた。

「……足りない？」

「……つつ、足りないに決まってるでしょっ……！」

瞬間、私の中の何かがキレた。その綺麗な顔を、強く睨みつける。私のお弁当なのに……っ

空腹と、訳の分からぬ事ばかりする荒川君への苛立ちが爆発し、ジワリと瞳の奥が熱くなる。

沸き上がる衝動のままに、繋がれたままだった左手をぶんっと振り払う。

そんな私に、心底驚きましたみたいな顔で固まつた荒川君は、直後、わたわたと自分のお弁当に手を伸ばしパカッと開けると、ずっと差し出してきた。

大きな体に比例した大きなお弁当。

ご飯

肉、肉、肉！！

隅っこに申し訳程度にキャベツの千切り

「……」

無言でお弁当を見つめる私に

「全部、やる」

「」

「だから……」

「うう」

…え？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9779y/>

あの、そこ私の席なのですが

2012年1月14日19時54分発行